

第2回生徒会主催

中幌呂での青春

中幌呂での第1日

佐藤忠雄先生

7月27日

3時半発、中幌呂行阿寒バスに乗車

乗客7、8人、阿寒バスの当路線の赤字大なるものと推察、3時30分定刻発車。

発車と同時にYシャツをぬいで横になる男あり。

年37、8にして顔面いやしからず。此の侍、当路線の利用、一、二度にあらざるものと確信す。

4時半、製粉所前着

ブロック工場へ向う。風さわやか、人影なし。土の香り、草の香り、母なる大地のにおいをかぐ。

山路の草、色あおあおとして、きそい立ち、

行く川の流れ又清し

岸边なる夕餉の煙しろじろと、拡声器の声木々にこだます。小橋を渡りてよりしばし我めざす城見えぬ。

5時半

夕食の用意全てととのう。菜はブタ汁。

味小々うすくはあるが、なかなか良し。(少しほめておかないと、奥様達にしめ殺されるおそれあり。)

おだてられて食い過ぎる。量の割には、カロリーおぼつかなし。



10時半就寝

浪岡先生とともに女子の宿舍の台所にまがりす。夜中に数度目覚める。室中より生徒の話す声す。先生のイビキ往復にして静ならず。

—作りたる歌一首—

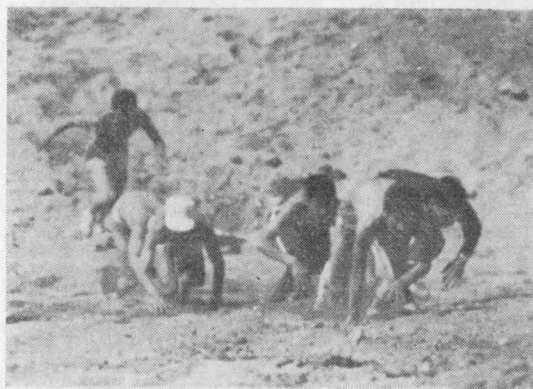
イビキの音に

おどろかされて 暁の

寝ざめしづかに

世を思うかな

(宗良親王)



キャンプに行って思ったこと

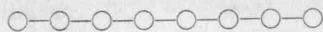
2 G 佐藤保子

中幌呂に着いた！。こゝで4日間、友と一緒に過ごすのだ。そう思い、あたりの景色に感心しているひまもなく、住居となる部屋のそうじにあたる。何んてきたないのだろう。でも、たゞみがあるだけ幸せと思わなければそして夕方、食事の仕度にかゝる。自分達の手で作った料理ほどおいしいものはない。先生を囲んでの、楽しい食事。こゝではどんなものでも、どんなことでも、気に

ならないのだから不思議なものである。夜、寝床の中で友と語り、その語らいを通して友の考え方を知り、友の良さを知る。そして、自分は全てにおいて、子供だと思いつつ、自身を反省する。こんなことも「キャンプならでは」なのだろうか。

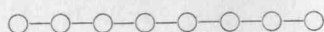
翌朝、川で顔を洗い、朝食をすまして、川遊びに出かける。一日、川に入ってはしゃぐ。水がとてもきれいだでも実際にはよごれているとのことである。ふと、人間もそうだろうかと思う。そんな事を今考えてもしょうがない。そんなことより水とあそんでいる方がずっと楽しい。夜、蚊にさまれながら、フォークダンスを踊る。「学校にいるとうまくおどれないのに」と、我ながら、感心する。そして、昨夜に続く語らい、（一というより、おしゃべりとした方が合っているかも知れない。）それはほとんどの部屋から苦情が出るまで続けられる。今思い出しても、楽しいことの方が多い。ほたるをみつけたといって喜んだこと、ゆかいだったスイカ割、太陽のもとでのサット＝クライミング、水遊び、料理コンクールなど……。

でも私達は、このキャンプの運営にあたってくれた執行部の方々に、協力的でなかったところもあったし、また執行部の方々も、反省するところが多いのではないだろうかと思う。学校キャンプの持つ意義をはっきりさせ来年からのキャンプが、もっとすばらしいものであることを望む。



中幌呂キャンプを反省する

生徒会執行部



7月26日から30日まで、中幌呂で実施された学校キャンプは、総勢200名が参加した。正確には197人、昨年の2倍弱にあたる。もうすでに、1ヶ月余も日がすぎ、キャンプについての反省やなにやらも全て終わっている。

我々は、学校キャンプは団体生活の場と考える。参加人数の上からも、その事は言えよう。だが、今回のキャンプで、それが十分果たされたかどうかには疑問が残る。我々が計画実施した様々な行事の内容、あるいはそれに



参加する生徒の様子、どちらをみても、団体的な行動と思われるのは、ほとんどない。わずか、参加していた各種クラブに、それがみられたにすぎない。もちろん、自然に囲まれたところにいると、解放的な気分になる事は自然だ。今さら規律に束縛されたくはないだろう。

しかしながら、学校キャンプの性格は、あくまでも団体生活、というところにある。その性格が、時として見失われた事を、我々は残念に思う。

その原因——1つは計画実施された行事の中に、団体的なものが少なかった事。そして、目的そのものが、生徒に徹底できなかった事である。究極はこの2つであろう。前者は、現地での勤労作業、毎朝のラジオ体操、従来の行事の徹底という事で解決される。後者も、印刷物の配布、説明会などによって解決されよう。

我々は、今回のキャンプについて、更にこのように思う。今回は、究極の団体生活という事に重点をおけば、成功とは言えない。200人の大勢での一行動として見れば、失敗ではない。大きな事件もなく、平穏におわったのは事実である。しかし、その平穏の中にも、種々数多の問題が内在している。我々は、いくら今回が失敗ではなかったにせよ、それらを見落とすわけにはいかない。例えば、参加者数の問題、一度に200人という数、発展して、現在のキャンプの方法を十分検討せねばなるまい。

より成功に近づくために、参加者は、今回のキャンプを十分反省すべきであろう。特に、執行部には、それが要求されよう。

学校キャンプの目的が十分果たされ、学校生活が有意義なものになるのを期待して、我々は、資料を製作する。

昭和40年8月29日

生徒会・奥宮記